

ストライクウィッチーズ
～ファイ・トゥ・
ピース Fight to
Pease～

すかいりいJ2@ハリボテ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ティーチャールスカイリイJ2との闘いの末、堕ちていった一機の散香。

しかし、目が覚めるとストライクウィッチーズの世界でウィッチになってしまっていた。

シヨーとしての戦争。闘うためだけに生まれ、飛び続けてきた彼女が、『守るため』に今飛び立つ。

初めまして。

初投稿となります。

ストライクウィッチーズとスカイ・クロラシリーズのクロスオーバーで、半分以上自己満足で成り立っています。

至らぬ点などあると思いますので、ぜひコメントや評価、指摘などを宜しくお願い致します。

あと、ストパンで好きなキャラはサーニャ、スカイ・クロラで好きな機体はスカイリィ系と翠芽です。

目次

設定資料	—	1
第一話	P u l l U p	7
第二話	T a k e O f f	15
第三話	K u l b i t	31
第四話	T u r n	46
第五話	S t o l e T u r n	55

設定資料

初めまして。

この度「ストライクウィッチーズ　〜ファイ・トゥ・ピース　Fight to Peace〜」をご覧いただき、誠にありがとうございます。

というわけで早速、当作品の設定に移りたいと思います。

申し遅れました、作者のすかいりいJ2@ハリボテでございます。宜しくお願い致します。

◇タイトルについて

スカイ・クロラシリーズのタイトルはとも変わつた表記になっています。例えばシリーズ第一巻のナ・バ・テアは「nane But Air」、二巻のダウン・ツ・ヘヴンは「Down to Heaven」と、発音表記のようになっていたことが特徴です。本作でもそれに倣い、このような形になりました。（あつてるかどうかは分からんケド）

「Fight to Peace」というのは、これまで企業同士のショーとしての戦争

に使われ、市民を守ることもない（基本的に巻き込まれない）ために、飛ぶ＝殺すという思考を持つ彼女が、501やその他軍人と触れ合うことで「守る」ことを意識してゆく話として描くことを決めたからです。元戦闘機の彼女からすれば、平和が一番の敵なのかもしれません。

◇主人公

名前：オリシナ・サンカ

性別：女

年齢：特に決めてない（外見上は16〜7）

見た目：草薙水素の髪を少し短くしたようなイメージ

使い魔：バセットハウンド（スカイ・クロラに出てくる犬）↑2話の時点では気づいていない

固有魔法：なし

階級：未定（どうしよう・・・）

一人称：私（空戦時にハイになると、思考上では僕になる）

501の面々の呼び方：ファミリーネーム＋階級

性格：現実主義寄り、頼まれたことはあまり断らない

感情表現：「函南」以上で「土岐野」以下

その他の特徴

・散香Mk-Bそのものであるため、他のストライカーユニットは使えない。（戦闘機であれば使える。）

・キルドレ（年を取らず戦死や事故死以外では死なない。加えて魔力も衰えない。）

・喫煙者 ただし、あれば吸うというだけで、なくても困らない。

・シールドが張れない（訓練で張れるようにはするつもり）

・運転は壊滅的に下手

・料理も壊滅的

・味覚が常人とかけ離れており、食べ物と飲み物の範疇ならば多少の旨い不味いはあれど問題なく食べられる。

・人の心境にはかなり鈍い。

・何もしていないときは右手で操縦桿を握るような形をとる癖がある。

・自分が女性であることをほぼ意識していない。

・小食

戦闘時の特徴

・交戦体制に入るとうつぶせのような形をとり、基本この姿勢は変わらない。

・一般的なウィッチが行うホバリングや下がりながらの射撃は一切行わない。（戦闘が終了しても旋回し続ける）

・ハイになると目が普段の2割増しで開き、ほとんど瞬きしない。また、文章上では句読点がなくなる。

・ドッグファイトメインなので小型には強いが、大型相手は苦手。（というか慣れていない。）

・基本的に一人で戦うが、ロットテになると僚機に気を配る。

■ 固有魔法を使わないという条件下では、この世界で対ウィッチ戦最強クラス

ストライカー&武装

散香Mk B

・二重反転プロペラの超軽量戦闘機

・もともとは震電のような形であったため、自動的にプツシャ型になるストライカーユニットでも使い勝手は変わらない。

・「風車」と呼ばれるほどロール性能が高い。これは、実機が武装を胴体内に収めたことで重量がほぼ軸に集約されたためである。

・他人が履いても一応起動できるが、飛ぶことができないうえ、オリシナに強烈な痛

覚を与える。(1話でオリシナが目を覚ました要因の一つ)

20mm連装機関銃

- ・銃に詳しくないので外見が何に似ているとかはあまり考えていない。
- ・機関銃を横につなげたような形。トリガーは一つで、マガジンも一つ。マガジンの形状は楕円。

- ・専用弾ではないため補給可能。

- ・えげつない連射性能を持つため、一瞬トリガーを引くだけで小型相手なら外装を剥がしコアを貫く。

ボーズMk1 対装甲ライフル改(予定)

- ・対大型ネウロイ用装備

- ・リーネが持つものと基本的に同じだが、銃身がやや短くなり、持ち手が本体から横に伸びる形になっている。(ザクマシンガンみたいなイメージ)

- ・相変わらずホバリングはしない。連射が聞かないので一撃離脱が基本。

- ・狙撃が主な運用のはずなのに普通に近づく。

フリーガーハマー(予定)

- ・上と同じく対大型用。

- ・ただし一斉発射できなくなり、トリガー一回につき一発となる。

・上と同じく接近して撃つ。(爆発に巻き込まれない程度には離れる。)

第一話 Pull Up

私は総てを見てきた

機体の新型として彼と飛び、しかし最後は彼と闘い、堕ちた。

彼のもとに配属され、彼の僚機として飛んだ。最も、彼は私が好きではなかったようだが。

彼と再び闘った。広い空ではない、ひどく閉塞感のある、コンクリートの壁の間で。

彼と闘い続けた。身体を変えて、中身を変えて。

私は飛んだ。ある時は一人で、ある時は大勢の私と。

私は堕ちた。私が堕ちていくところを見た。

これからも飛び続けるだろう。

これからも堕ち続けるだろう。

私が造られなくなる、その最後まで。

□
□
□

side 坂本

早朝、いつものように鍛錬に励もうと浜辺まで来たわけだが、なにやら妙なものが流れ着いていた。見たところウィッチのようだが、見慣れない型のユニットを履いている。それに描かれているマークにも見覚えがない。何度か呼びかけてみたが反応なし。気を失っているようなので、とりあえず医務室へと運ぶことにする。

「で、運んできたわけね。」

そう言うミーナの顔が疲れ切って見えるのは気のせいではないだろう。

今でこそ形にはなったが、多国籍部隊というのには問題が付きものだ。ミーナの気苦
労も絶えないことだろう。

こういう時は風呂に入るのが一番だ、今度誘ってみよう。

「ストライカーユニットも見てきたが、普通のものより軽いこととプロペラが二重になっていること以外、何もわからなかったな。」

「使われてる金属も見たことない奴だったねー」

バルクホルンとハルトマンも合流したが、その表情は険しい。結局、わからないことがわかっただけか。

「ともかく、今はこいつが目を覚ますまで待つしかないだろう。」

もうすぐサーニヤも帰ってくる。報告する相手がいなくては困るだろう。

サーニヤから報告を受けてからもう一度来ることにして、私たちは医務室を出た。

■ side ???

出来の悪い夢を見ているようだ。翼を失い、手と足が生えている。

ゆっくり身体を起こす。初めてのはずなのに、やけにスムーズにできた。

本当によくできた夢だ。そういえば私の中にいた一人が「悪い夢を見たら頬をつねる」と言っていた。試しにやってみる。

痛い。

夢は覚めなかった。つまり夢ではないということだ。厄介だな。

そこで扉が開く。誰か入ってきた。銀髪で小柄な少女だ。覚束ない足取りでこちらに向かってくる。

「.....」

◇ドサツ

「!？」

ベッドに倒れこんできた。しかもそのまま寝てしまった。

明らかに寝ぼけている。部屋が違うどころか、私がいることにも気づいていない。

「起きたほうがいい。ここは君の部屋じゃない。」

ダメだ、起きない。

いつそのままでいいのとは思ったが、なぜだろうか、とても面倒な予感がする。

「サーニヤ、ここにいるのか？・・・!？」

別の銀髪が入ってきた。どうやら私の予感が当たったらしい。

■ side エイラ

サーニヤが部屋に来なかった。

間違えずに自分の部屋にたどり着いただけかもしれないけど、変な予感がしたから占ってみたんだ。そしたら案の定、医務室にいるんじゃないかって出た。

シヨウガナイナク。風邪をひく前に部屋に連れて帰ろう。

「サーニヤ、ここにいるのか？・・・!？」

目を疑った。

サーニヤが寝てる。・・・これはイイ。

その隣に誰がいる。見たことないけどウィッチっぽい。けど、ソイツもベッドにいる。しかもサーニヤと、そ、そ、そ、添い寝してるっ!! (フィルター発動中)

そんな・・・そんな・・・

「道に迷ったのかい？ それとも、私に会いに来たのかな？」

「えっと、その・・・あ。」

「ふふふ・・・かわいいね。こっちにおいで。」

「・・・はい。」

~~~~~

だめダツ!!!

「サーニヤから、離れロオオオオオオオオオオ!!!」

気が付けば右手が前に出ていた。腰も入った渾身の右ストレートだった。

どうやらない具合に入ったらしく、そのまま白目をむいて倒れた。サーニヤを誑かす

悪いヤツめ!

でも、なんでコイツは医務室にいるんだ？

■

side ???

さつき殴りかかってきたやつは、エイラというらしい。今は周りを囲まれ、その中心で「正座」というものをやっている。

「まったく、いきなり怪我人に殴りかかるとは・・・。スオムスのエースが聞いて呆れる

な。」

「だ、だつてえ……。」

さつきからずつとこんな調子だ。いくらキルドレでも、ここまで過激な奴はそうはいない。

と、さつき寝ぼけていた銀髪が近づいてきた。彼女はサーニヤというらしい。聞けな夜間哨戒が主な任務らしく、朝方に帰つてきてはこうして部屋を間違えることがよくあるらしい。

……寝ぼけてるなんてものじゃないと思うが。

「あの、本当にすみませんでした。」

だがこうして何度も謝ってくれるあたり、礼儀正しい子であるようだ。

「大丈夫。もう気にしてない。」

ちなみになれだけ思いつきり殴られても目が覚めなかった。ここでようやく現実であると諦めがつく。

「さて、放つておいてすまなかつたな。」

一段落ついたのか、眼帯（サカモト少佐というらしい）が話しかけてきた。

ようやく本題というわけか。こちらも状況がわからない以上、この話し合いは有意義にしたい。



「改めてだが、私は坂本美緒。所属は扶桑皇国海軍で、階級は少佐だ。」

「ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ。カールスラント軍所属で階級は中佐。この部隊、第501統合戦闘航空団の隊長を務めているわ。」

「同じくカールスラント軍人のゲルトルート・バルクホルン大尉だ。」

「同じくカールスラント軍、エーリカ・ハルトマン中尉だよ。よろしく。」

「シャーロット・E・イエーガー大尉だ。シャーリーって呼んでくれ。」

「フランチェスカ・ルツキーニ！ロマーニヤ出身で、階級は少尉だよ！」

「ペリーヌ・クロステルマン中尉。自由ガリア空軍のウィッチですわ。」

「サーニャ・V・リトヴァク中尉。オラーシヤ帝国陸軍所属です。」

「イテテ・・・あく、エイラ・イルマタル・ユータイライネン少尉だ。さつきは、その・・・悪かったな。」

全員が名乗り終え、私の反応を待つ。あつちが名乗った以上、こちらも名乗らなければならぬ。

が、そもそも私にはもともと名前などない。開発コードがそれにあたるが、あれは『私たち』の名前であって『私』の名前というわけではない。それに、あれだけだと人の名前のようにとなると少し違うだろう。

だがこうなることはある程度予測できていたし、幸い考える時間もあつた。

「ここは、私の大切な人物の名前を借りるとしよう。彼と出会ったとき、かけになった、彼の女の名を。」

「・・・サンカ。オリシナ・サンカ。」

## 第二話 Take Off

side ミーナ

「・・・サンカ。オリシナ・サンカ。」

ようやく聞き出せた彼女の名前、聞く限りでは扶桑系の人なのかしら。でも美緒はユニットともども見たことがないって言っていたわよね。まあ、そこは彼女に聞いてみましょう。素直に名前も教えてくれたし、きつとスムーズに進むでしょう。

「ではオリシナ。お前はどこから来た？名前からして扶桑人のようだが、所属はどこだ？それと、あのストライカーはなんだ？」

美緒ったら容赦ないわねえ・・・。無意識でしょうけど威圧しつぱなしよ。

でも、あの子もすごいわね。表情一つ変えずに聞いてるなんて。

見た感じは15、6くらいかしら・・・。背は高くもなく低くもなく、色は白め。表情もほとんどないから、お人形みたい。そして、なぜか見た目以上を生きてきたかのような、不思議な雰囲気。

どこか危険で、どこか儂い、そんな彼女から発せられた言葉は、

「フソウってどこのこと？それにストライカーって？」

私に頭痛の種を植え付けるには十分だった。



side オリシナ

「ふざけているのか貴様!!」

バルクホルン大尉にそう言われたが、実際わからないことだらけなのだ。

まず国名だと思われるもの。フソウ、カールスラント、ロマーニヤ、ガリア、オラーシャ。どれも聞き覚えがない。

次にウィッチとストライカー。ウィッチは魔女という意味だが、何か由来でもあるのだろうか？ストライカーというのも、どういうモノか想像がつかない。

そして彼女たちのこと。見た目からしてキルドレのように思えるが、その割には外見年齢もばらばらだ。ルツキーニ少尉に至っては言動や行動が本物の子供っぽい。

「落ち着けてバルクホルン」

「これが落ち着いていられるか！離せリベリアン！」

ではキルドレではないとしたら？なおさら不自然だ。パイロットがキルドレでも、整備士は大抵大人がやっている。特に、こういう事情聴取なんかがあれば、大人が出張はずだ。

それにしても、彼女がここの隊長か。似ているところなど見た目の年齢くらいだが、どことなく冷徹で無鉄砲な彼女を思い出す。

そんなことを考えていると、ミーナ中佐と目が合った。疲れ切っているように見えるのは気のせいだろうか。

「なにかしら？」

「質問してもいい？」

「……どうぞ。」

こんなやり取りを、前にもしたような気がする。

私ではなく、私の中にいた、1人のキルドレの記憶。

「あなたは、キルドレですか？」

side ミーナ

『キルドレ』

それが何かはわからないけど、うすら寒いものを感じる。

彼女の目からは何も読み取れない。その質問はどういう意味なのか、それとも意味なんてないのか。

わからない。息が詰まりそう。

あなたは、何者なの？いえ、何なの？

「あなたは、一体……」

そう呟いたその時だった。

ウウウウウウウウウウウウウウウウ……

「ネウロイ！」

「誰が叫んだかはわからない。でも、私たちのすべきことはただ一つ。

「501、出撃！」

「「「「「了解!!」」」」」

頭を切り替えて出撃準備に取り掛かる。

一度、ベッドの彼女に振り向いて、そのまま逃げるように部屋を出る。

彼女の眼は、最後までなんの感情も映していなかった。



side オリシナ

私自身、感情表現が乏しいであろうことはすでに把握している。よつほどのことが起きなければ、それらしい感情は表に出ないだろう。

だから、今の私の顔は、さぞかし滑稽なことになっているはずだ。

窓の外を飛んで行ったのは、さつき飛び出していったウィッチ達。全員が足に妙なものを付けていて、頭からは犬やらネコやらの耳が、腰のあたりからは尻尾まで出ている。

本当に魔法でも使えるのだろうか？

・・・もし使えるのなら、もう一度飛びたいな。

『』

「!？」

「今、なにか・・・」

『』

「!？」呼んでる？・・・」

さつきよりもはつきり聞こえた。

何を言っているかはわからない。けど、何を伝えたいかはわかる。

「・・・こっち？」

私はそのまま、『声』を追って、医務室を出た。



「・・・」

たどり着いた格納庫で、私は言葉を失った。

ハンガーの真ん中に鎮座しているソレは、彼女たちが履いていたものとよく似ている。私の知るものとも似た部分があった。

全体が灰色の塗装に黒の照り返し防止塗装。黄色のラインやロストック社のロゴ。



でも、それだけじゃない。私にはわかる。いや、私だからわかる。これは、散香だ。わたし

「……！」

気が付けば私は走り出していた。

周りの整備士が止めていたようだけど気にしない。

そのまま私は、それが当たり前前であるかのように足を入れた。

「おい、あんた！勝手なことは……!!」

瞬間、私は理解した。

ばらばらだったパズルのピースがびたりとハマるように。

割れた器の断面が、びたりと合わさるように。

ああ、やつぱり……、これは私なんだ。

—— オカエリ ——

「……ただいま。」

そう呟いて、近くにいた整備士を見る。小さく悲鳴を上げられた。なぜだろう。

「武器は？」

「……は？」

「武器はない？」

ようやく一つになれたが、まだ足りない。

私はセスナ機でも、旅客機でもない。

「あ、ああ．．．あんたが持ってたやつか？　ここにあるが．．．」

「貸して。」

持つてきてもらった銃を受け取る。20mmの機銃を横に連結したような見た目で、下には馬鹿でかいドラムマガジンがついている。

銃なんて持ったことないけど、これ以上にないくらいしつくりくる。やっぱり、これも私だ。

「離れて、危ないよ。」

そう言つて整備士たちを遠ざける。

これから飛べる。そう考えるだけで落ち着かなくなる。

ハンドサインで合図して、私は空へ飛び出した。



side バルクホルン

状況は芳しくない。

観測所からの情報では中型が2体と小型が1体だったが、会敵早々に中型の一部が分離、小型ネウロイとなって襲い掛かってきた。

中型1体につき3体、計6体のネウロイが増えたことになる。戦力差は3対9から9対9、同数だ。

しかも、分離した小型は積極的には攻撃してこず、中型を守るように動いているので思うように攻撃が通らない。

小型を落とそうにも中型が絶えず攻撃してくるので狙いを定める隙もない。

それに最初からいる小型の動きがすばしっこく、執拗に後ろをとろうとしてくる。さしずめ攻撃機とそれを守る直掩機、そして迎撃機といったところか・・・!

こいつらは中型にしては足が遅いようだが、それでも着実にブリタニアへと近づいている。

「くそっ! ちょこまかと・・・!」

「いい加減、当たりなさい!」

「各機、視野を広く持つて!・・・美緒! コアの位置は?」

「・・・ちっ、ずいぶん狙いにくいところだ・・・! 両方とも中央やや下だ!」

コアの位置は分かっていたが状況は変わらない。目標は見えているのに届かない!

私の固有魔法は接近しなければ使えない。他に打つ手は・・・。

そう考えて周りを見渡す。

ミーナの空間把握は相応の集中力が必要だが、この状況で足を止めるわけにはいかない。

ハルトマンの『シウトウルム』やペリーヌの『トネール』はこの乱戦では使えない。ルツキーニも私と同様、近づけなければ意味がない。

リベリアンの超加速なら弾幕を突っ切れるかもしれないが決定打がない。それに、単騎で突っ込むにはリスクが高すぎる。

以前使っていたルツキーニとリベリアンの合わせ技なら？・・・ダメだ、予備動作が必要なうえに使用後の隙も大きい。

エイラの未来予知でも避けるのに精いっぱいのようなだし、サーニヤに至っては武装も含めて小型相手に分が悪い。

クソ、何かないのか!?

ガガガガガガキンツ

「!？」

しまった！弾切れか!? いや、弾が詰まった!!

よりによってこんな時に・・・!

「大尉！」

一瞬銃に気を取られていた私を、気が付けば2体の小型が狙っていた。

「……まずい！避けきれない！シールドを張っても、もう1体は防げない！」

ネウロイの赤い模様が光って……

「トゥルーデ!!」

ガガガガガガガガガッ

小型の1体が爆ぜ、同時にもう1体がビームを放つ。

こっちではなく、上に。

瞬間、ネウロイのわきを何かが高速で突っ切つたと同時に、そのネウロイも砕け散る。ほんの一瞬見えたソレは、ここにいるはずのないものだった。

「……オリシナ!？」



side オリシナ

雲はほとんどない快晴。

彼女たちが飛んで行ったほう（ガリア方面というらしい）に飛び続ける。かなり遠方に黒い点とその周りを飛ぶ何か。

高度を上げて、近づく。

見えた。黒い化け物とウィッチ達だ。

あの黒いのがネウロイというやつかな？大きいのが2つ、小さいのが7つ。うち1つは動きがいい。

ネウロイって何だろう？そんな考えは、一瞬で消えてしまった。

セーフティを解除

両手で構える

背面になつて 降下

ウィッチ一人に ネウロイ2つ まだ気づいていない

動きの止まったやつを狙う

僕の右手が聞いてくる

撃つてもいいかい？

撃つていいよ

コンマ数秒 トリガーを引く

もう片方が気づいた 撃ってくる  
体をひねる

勢いを殺さず接近

あいつがこっちを向く もう遅い

トリガーを一瞬 反転 上昇

動きのいいやつを探す

いた 右からくる

敵から攻撃 この距離と速度じゃ当たらない

そのまま緩やかに上昇 あっちもついてくる

撃ってきた でも慌てない

身体を反らす 数を三つ数えて エンジンをめいっばい回す

背面になって 一瞬静止する あっちは対応できていない

トリガーに指をかける まだ

2

1

今

当たったのを確認して降下 加速

ネウロイはやられると碎けて白い破片になるらしい。でも 関係ない  
次は あつちか

side シャーロット

「うそだろ・・・」

自然とそんな言葉が口からこぼれる。

私たちが束になっても変わらなかつた状況が、わずか数十秒で激変した。

奇襲とはいえ2体の小型ネウロイを1回のコンタクトで撃墜、さらにあれだけ手を焼いていたコア持ちも、あんな曲芸飛行まがいの機動で落として見せた。

しかも土壇場でやったわけではなさそうだ。ただ淡々と、敵機を落とす。タダモノじゃない。

「・・・っ！ 各機、集中しろ！ この機を逃すな!!」

つと、いけないいけない。まだ敵は残ってるんだつたな。

見た感じ、あいつはオリシナ小型を優先して潰しているらしい。

なら、中型くらいは私たちがやらなきやウィッチの名折れだ！



「ルツキーニ！ こっちに來い、あれをやるぞ！」

さあて、いっちょ派手にやりますか！



side オリシナ

最後の小型を落としたところで 視界に妙なものが映り込んだ

イエーガー大尉がルツキーニ少尉を投げ飛ばした

え、投げ飛ばした？

少尉はそのまま敵に突っ込む。いや、なにか青い壁のようなものを出している。

ぶつかつた。ネウロイの表面がごっそり削れている。

もう片方ではバルクホルン大尉が銃で殴りつけている。

坂本少佐も銃ではなく反りの入った剣で切り付けている。

・・・なんだこれ？

さつきまでハイだった気分が一気に冷めていく。気分が悪くなつたというより、理解が追いついていない。

あれがウィッチの『魔法』なんだろうか？

それからわずか1分足らずでネウロイを仕留め、基地に帰投した。  
帰ってくるなり部屋に連れていかれ、尋問が始まった。  
やっぱり、地上は嫌いだ・・・。

## 第三話 Kulbit

side オリシナ

・・・どうしてこうなった？

今いる場所は、基地正面の上空。晴れ。微風。

正面にはバルクホルン大尉とイエーガー大尉、隣にはクロステルマン中尉。

そして、観測係としてリトヴァク中尉とユートイライネン少尉。

手にはオレンジ色の模擬戦用の銃で、中身はペイント弾。

ルールは簡単。2 on 2で、相手に当てれば撃墜。シールドと固有魔法による攻撃はなし。

それ以外は基本自由だけど、怪我を負わせるようなことは極力避けること。

・・・どうして、こうなった？



side ミーナ

四人が開始位置につくまでの間、私はさつきまで行われていた事情聴取の内容を思い返していた。

出撃前のことを加味し、私たちのことやネウロイについてと、彼女が知る国名と世界情勢について話し合った。

結果、私たちは驚きを隠せなかった。ネウロイやウイッチを知らないどころか、彼女は自らが『散香』という戦闘機であると言いつ出したから。

初めは誰も信じなかった。けど、さっきの空戦で見たあの動きは、ウイッチとネウロイの戦闘ではまずありえないものだったし、彼女がユニットと強いつながりがある（シャーリーさんが起動させると突然苦しみだした）ことから、信じざるを得ないと判断した。

別の世界から来て、どういうわけかウイッチになった一人の戦闘機。

ネウロイなどおらず、人間同士が殺しあう世界。

その戦争が『シヨ』として行われていること。

パイロットを務める者の多くが――

『『キルドレ』か……』

「美緒……」

信号弾を持った美緒がやってくる。考えていたことは同じのようね。

「正直、信じられないわ。キルドレのことも、彼女のことも。」

「だが、嘘を言っているようにも見えなかった。それに、あいつのユニットが何よりの証拠だ。」

そう、彼女の世界はあまりにも進んでいた。

人によって生み出された少年兵。

戦死しないかぎり不死身の子供。

戦闘経験や細かな癖を引き継いで生まれてくる他人。

永遠に終わらない戦争<sup>シヨウ</sup>。

私たちの知る航空機とは全く異なるデザイン。

動力もプロペラも機体の後ろに乗せたブツシャ型。

ただ多く殺すために作られた、様々なフォルムの戦闘機。

大型ネウロイほどもある全翼の爆撃機。

彼女が落としてきた機体の数々。

そして最後に、彼女がこんなことを言ってしまった。

「私に追いつくことができるのは、あの人だけ。」

ガタツ

『あの人』が誰かを聞く前に、シャーリーさんが興奮した様子で彼女に食いついた。

・・・スピード狂の彼女に火をつけてしまったらしい。

「・・・はあ」

思い出したため息が出てきた。

結局スピード勝負ではなく、さっきの戦闘で測りきれなかった实力を見るために模擬戦という形になり、「リベリアンだけではまともに測れるかも怪しい。」と言ってトウルーデも参加。数を合わせるためにペリーヌさんも参加させ2対2で戦うことになった。

観測はサーニヤさんをお願いした（エイラさんは無断でユニットを持ち出した）。

で、今に至ると・・・。

「まったく・・・。」

「はっはっはっはっは！ まあいいじゃないか。それに、あいつの實力も見ておきた

いしな。」

「・・・あの子を501に引き込む気？」

「ミーナもそのつもりだろう？」

ええ、もちろん。

突然現れて困惑しているでしょうけど、戦力は増えるに越したことは無い。衣食住を保障してあげれば、彼女も断る理由はないはず。

あとは上層部を説得するだけだし、それもいくらでも言い訳はつく。ただ・・・どれだけ言い繕っても彼女を利用することには変わりはない。

「・・・始まったな。」

見上げれば、白い線が絡み合うように動き続けていた。

でも、なにか・・・。



side サーニャ

オリシナさんの動きが鈍い。

戦闘機動を見たのはさっきの1回だけだけど、それに比べればかなり鈍いように見える。

ウィッチとしての動きは、それでも十分すぎるくらいに上手い。固有魔法を使っているようにも見えないのに、まるで後ろに目があるんじゃないかって思うくらいに危なげなく避ける。

でも、攻撃になるとほとんど何もしない。後ろにつけそうなところでも、積極的に動いていないような気がする。

手を抜いているのか、それとも何か理由があるのか。

「あゝ、ペリーヌが先に堕ちるかナ。」

エイラの言う通り、バルクホルンさんとシャーリーさんがペリーヌさんのほうに向かった。

・・・あれ、なにか揉めてる？

・・・通信？

「なあ、固有魔法で攻撃しなけりゃいいんだよな？」



side  
シャーロット



「おい、リベリアン。何のつもりだ。」

「そのままの意味だよ。今からあいつと踊ってくる。」

さつきからオリシナの奴、全然仕掛けてこない。

手を抜いている、というより本気を出していない感じだ。いや、出せていないようにも見えた。

なら、いっちょ驚かして本気にさせてやろう！

「じゃ、ペリーヌのほうは任せた！」

バルクホルンの返答も待たずに反転、固有魔法で加速して一気にオリシナのほうに近づく。

お、驚いてる。あんな顔もするんだな。

そう考えると同時に発砲、それをあいつは紙一重で避けやがった！どんな反射神経だよ！

「さあて、これで目を覚ましてくれたかな。」

といつても、次で終わりにするつもりだけど。

再び超加速して後ろから近づく。もうちよい・・今！

・・・我ながら絶妙のタイミングで引き金を引いて――

あいつが消えた。



side オリシナ

例えるなら、炭酸が抜けた常温のサイダーのようだ。

どうにも手ごたえがなく、それ以上続ける気にならない。

極限状態だからこそ全力を発揮できるし、そういった中で常に飛んできた。

実力を測るって意味もあるんだらうけど、私に言わせれば実力なんて出せるわけがない。  
い。

適当に流して、終わらせよう。そう思っていたその時、目の前の点が塊になった。

ほとんど条件反射だった。わずかに体を傾け オレンジ色のペンキを避ける

ほぼ同時に、私は大尉とすれ違った。

なんだ今のは？

あれが魔法か？

なぜ最初から使わない？

あつちも手を抜いていた？

視線を後ろにやる。少し離れてるけど、今のを使われたらすぐに追いつかれる。次はない。

面白い

エンジンを回し 速度を上げる

チャンスは一回 一瞬だけ

あつちも加速体制に入る まだ慌てない

さあ 来い 来い 来い

来た

体を起こす 腕も広げる

歯を食いしばってGに耐える 1秒もない

真下を弾がはしる すぐに体を戻す

右手が撃ちたがる まだだ もう少し

撃て 命中

再び加速 もう一人を追いかける



side エイラ

開いた口がふさがらなかった。明らかにさつきまでと動きが違う。

てゆうか何だアレ!? あんな反応、未来予知でもないが無理ダロ!

真正面から加速しての射撃。完全に不意打ちだったのに、最小限の動きで避けやがった。しかもその後の追撃も、タイミングを合わせてやり過ぎした上に撃墜までしてしまった。

あの加速を一回見ただけで捉えたのか? それでもあそこまで完璧に合わせられるもんなのか!?

見ろよ大尉のあの顔。何が起きたかもわかってなさそうダ。。。

「エ、エイラ。判定。。。」

「え。。。あ、シャ、シャーリー機、撃墜!」

side バルクホルン

『シヤ、シャーリー機、撃墜！』

「何?！」

シャーリーがやられたのか?にしても早すぎる!

基本的にいい加減で自由気ままな奴だが腕は確かだ。少なくともただ油断して撃墜されるようなヤツではない。

どうする、先にペリーヌを落とすか?それともオリシナのほうに行くか?

相変わらずこつちが後ろをとり続けているが、青の一番は伊達ではなく、決定打には至っていない。

・・・これ以上の消費でヤツと戦うのは厳しいか!

すぐに反転、オリシナのほうへ向かう。戦場で正体不明なものほど怖いものはない。はつきり見えた。・・・なんだ、さつきとはずいぶんと雰囲気が違うような・・・。

瞬間、あつちから先に撃つてきた。反射的に回避するがそのまま後ろにつかれる。

上昇、下降、加減速や旋回を繰り返すが全く離せない。とんでもない機動性能だ。後ろを向けばヤツの大きく見開いた目が常に私をとらえている。

くそっ、どうする？何か手は・・・ん？

そういえば、あいつは自分が元戦闘機だと言っていたな。はつきり言っただけで信じていないし信じるつもりもないが、仮にそうだとするとどうだ？常にうつぶせのような姿勢をとり、正面方向にしか攻撃しない。戦闘機であった頃の癖が抜けていないのだとしたら？

・・・被弾のリスクは高まるが、これならばあるいは。

思い立つと同時に急上昇。あつちが追ってくることも確認する・・・今だ！

「喰らえ!!」

そのまま減速、ホバリングしながら真下に向かって撃ちまくる。当たればそれでよし、当たらなくても後ろをとれる。

よし！避けられたが減速できない！このままやり過ぎて後ろに・・・!?

side オリシナ

ウィッチならば360度どこへでも撃てる ホバリングも可能だ

僕には難しいかもしれない 戦闘機が空中で止まることなどできない

だから あつちが急上昇を始めた時から こつちも準備に入る

チーム間で無線は使えるのだが 今の今まで切っていた

このまま墮とせるかもしれないけど 保険を掛ける

「……つとー聞いていますの!? 援護しますわよ!」

通信を開けたとたん怒鳴り声 ちよつとうるさい

「聞いている。合わせて。」

「……は?」

彼女の位置は……あそこか なら 僕はこつち

「喰らえ!!」

真下に撃つてきた これも予測済み

身体をひねって避ける 同時に身体を反らして仰向けに

トリガーを引く

「! くつ!」

避けた でも大丈夫。

「チェックメイトですわ!」

そつちには中尉がいるから。

side ミーナ

「単刀直入に言うわ。一緒に戦ってちょうだい。」

模擬戦の結果はオリシナさん・ペリーヌさんのチームが勝利した。ただ、そこから読み取れる情報は驚愕すべきものだった。

オリシナさん自身の証言から固有魔法は使っておらず、あれだけの軌道を動体視力と反射神経だけで行ったこと。

シャーリーさんの加速については、表情や目の動きを見ればおおよそのタイミングはつかめる、あとは加速のスピードだがこれは一度見た、とのこと。

最後の一連の流れも、ペリーヌさんが大体どこにいるのかは把握していたらしい。

そして何より、私たちとは場数が違いすぎる。

一人のウィッチをエースと呼ばれるまで育て上げることの大変さを考えれば、彼女を引き入れるためには大半のことはするつもりでいる。信用していない子もいるでしょうけど、彼女を引き入れれば隊員の生存率はグッと高まる。

「いいですよ。行く当てもないので。」

なんていろいろ考えていたら、あっさりと了承されてしまった。



え？本当にいいの？

「はっはっは！そうかそうか。よし、これからよろしく頼む。」

いやいや、美緒ももうちよつと考えてあげて！

「お前の話を信じるわけではないが、まあ、お前の腕は信じてやってもいい。」

「素直じゃないねえ、トゥルデー。ま、こつちもよろしく！」

「そうと決まりや、今度おまえのユニットを見せてくれ！」

「私も気になる〜！見せて見せて！」

「まったくこの二人は……。まあ改めて、よろしく願いますわ。」

「……おまえ、ホントは未来予知できるんじゃないか？」

「エイラ、そんなこと言つてはダメよ。……あ、よろしく願います。」

あれ？これ私がおかしいの？なにか間違えてるかしら？

「皆さん、よろしく願います。」

ああ、勝手に話が進んでいく。

……でも、入ってくれることには変わりないわね。

「ようこそ、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』へ。あなたを歓迎するわ。」

## 第四話 Turn

side ミーナ

先日新たに加入してくれたオリシナ・サンカさん。軍への説明が終わって保護という名目で501にしていることができるようになり、形としては民間協力者ということになっている。

ちなみに彼女自身のことはまだしもユニットは言い訳が付かないので、未来から飛ばされてきた扶桑人ということにしてある。対小型戦のエキスパートであり、アグレッツサー部隊でもあったと。

彼女は今、ブリタニアの訓練学校にいる。先の「言い訳」を報告した際に空軍大將から教導を依頼されたから。

あまり彼女を一人にしておきたくはなかったけど、参加してくればこれ以上は無しにする上に501にも融通を利かせてもらえららしい。はつきり言つて人を売つていようなものだけど、彼女が了承したので（本人はウィッチと戦いたかっただけらしい）話に乗ることにした。

・・・ここまではまだいい。未来のユニットをどうこうするわけではないので、彼女

の素性がばれることはほとんどないだろうし、彼女のノウハウが得られるならあちらも強硬な手は使わないはずだから。

問題は彼女が行った教導の結果なのだけど……、まあ、その、あれよ……、きつといじめていたわけじゃないはずよ。……たぶん……。



side オリシナ

昨日ここに連れてこられて、その日の午後は訓練生や教官の様子を見ていた。今まで教導なんてしたことがなく、一応呼ばれてるからには教えられることを教えようと思っただからだ。

が、実際見ると拍子抜けしそうなくらい緩い。訓練を積んできたという自信の表れか、実戦を知らないだけか。隣で走っている子がこけて、ひざを擦りむいただけで騒ぎ出すような連中だった。

「皆いい子なんだが、緊張感というかなんとというか……、戦場をなめてる気がしてな。」  
そういった教官の眼は、呆れとともに明日が楽しみでしようがないといった感情がにじみ出ていた。

・・・そういうことか。一応確認はしてみる。

「私は何をすれば？」

教官の眼がキラリと光った。

「戦場を教えてやってほしい。徹底的にな。」

そして今日、朝から教導が始まった。

結論を言えば、私は彼女たちの自信やらなんやらをへし折ってしまつたらしい。

セオリー通りにはいつものストール戦法で、ロツテを組んだ相手には互いの射線が重なるように動き、突っ込んできたやつは他からの攻撃の壁として利用しつつ、必死に次を考えるやつには考えてる間に接近して、逃げたやつは手が届きそうな距離まで追いかけて。

そうして午前いっぱいかけて訓練生全員を教導した。

終わってみれば、自信とプライドに溢れていた彼女らのうち半分は泣いていて、ほとんどは私と目が合うと小さく悲鳴を上げた。何人かいた来賓の大人達も呆れたような顔で、一番偉そうな男（空軍大將らしい）も終始苦笑いだつた。

午後は教導を踏まえた講義形式となるらしい。が、元々物言わぬ戦闘機の私に講義などできるはずもない。そのため、講義というよりは質疑応答の形にしてもらつた。

「改めまして、第501統合戦闘航空団所属の民間協力者、オリシナ・サンカです。」

見渡せば全員が背筋を正して聞いていて、その顔には緊張が浮かんでいる。目があつたやつはみるみる顔色が悪くなる。・・・殺されるとでも思っているのか？

「まずは皆さん、午前の教導演習お疲れさまでした。皆さんの動きから、日々の厳しい訓練を乗り越えてきた強者であることがうかがえました。」

これは本心だ。訓練を受けたものとそうでないものははっきりと違いが分かる。・・・皮肉だと取られているようだが。

「生憎と私は実践での指導が主なので、こういつた講義ではうまく話すことができません。ですので、皆さんからの質問に答えていく形にしたいと思います。」

side マロニー

「それでは、質疑応答を始める。質問のある者は挙手するように。」

例の計画がようやく形になりつつあるタイミングで、突如現れた未来のウィッチ。

彼女の實力を図る目的でこの教導を依頼したが、その結果は予想以上だった。

総てにおいて既存のユニットを凌駕するストライカーに、圧倒的な空戦能力を有した

ウィッチ。世界中を探しても彼女と一対一で勝てる者はいないとも思えるものを、彼女はこの教導で示した。

だが、彼女は普通のウィッチとどこが違う。私の勘ではあるが彼女は……。

「は、はい！ネ、ネウロイと戦うときに気を付けているかとは何ですか？」

「視野を広く持つこと。敵をよく探すこと。」

「対小型のスペシャリストであることは分かりましたが、大型はどうしていたのですか？」

「……攪乱と牽制。主な攻撃は火力の高いウィッチにまかせてた。」

「それは、スコアを気にしていないということですか？」

「特に気にしてない。今日、何機墮としたかだけ。」

……人を相手にしたことがある。それも演習や訓練ではなく、実戦で。

彼女の視線や表情は下からでは見えなかったが、その機動やタイミングは決してネウロイとの戦闘では得られないものだ。

「も、もしも隣を飛んでいた人が墮ちたら、どうしますか？」

「どうもしない。残念だけど、戦闘中は気にしない。それに、誰も死なないことなんてない。」

「っ！……僚機が死んでも構わないということですか!？」

「後味は悪くなる。でも、人が死ぬなんていつものこと。気にしてたら自分が堕ちる。」  
ではなぜ人と戦う？ネウロイがいる以上、人間同士が戦争を起こすことは皆無だ。悔しいが、人が殺しあわなくて済むのはネウロイのおかげともいえる。

人を相手にするとすれば、どういったときか。二つほど考えられる。  
一つは反逆者の鎮圧、もしくは口封じ。つまり、命令を受けて実行すること。  
もう一つは……。

「……あく、えっと、その……。み、未来から来たと伺いましたが、ライバルのよう  
な人はいましたか？」

「……どうしても勝てないのが一人いた。私も何度も堕とされた。」

……ネウロイが存在しないこと。

「一度もですか!？」

「一度も。」

「ほ、本当に人間ですか!？」

「勿論。」

「固有魔法は!？」

「ない。」

私は、ネウロイの殲滅のために悪魔に魂を売った。だが、その先がもし人間同士の……

ウィッチ同士の戦争だとしたら・・・。

私の目指したものは一体・・・。

その後も質問は続き、彼女はそれに答えていった。

ロツテで飛ぶうえでの注意点。

演習での個々の動きと指摘。

ドッグファイト、一撃離脱などのコツ。

恋人はいるのか。

好みのタイプ。

3サイズ（誰だ聞いた奴は）などなど。

質問が戦闘に関係のないものになり始めたころに時間となり終了した。

・・・やはり一度彼女とは話しておいたほうがいいかもしれん。



「オリシナ・サンカ、出頭いたしました。」

「うむ、楽にしてよい。そこに掛けてくれ。」

解散した後、私は彼女を呼び出した。防音性のある部屋を一室借り、人払いもしてあ



る。

「……単刀直入に聞こう。君は何度ネウロイと戦った？」

「……覚えてない。」

……ふむ。やはりというか、そう返してきた。

「ここで話したことは外に漏れることは無い。もちろん、私も口外しない。」

「……一つ、質問してもいい？」

む？そつちから来たか。まあいい、そのほうがこちらも対応しやすい。

さて、何を聞いてくる。……未来のウィッチ。

「あなたは、……」

・  
・  
・  
・  
戦争が続いてほしい？」

## 第五話 Stole Turn

side リネット

「ブ、ブリタニア空軍から来ました、リネット・ピシヨップ軍曹です！よ、よろしくお願  
いしましゅっ！」

いきなりかんじやった……。うう……。恥ずかしい。

たぶん今の私の顔は真っ赤になってると思う。

「はっはっは！元気のいい新人だな。扶桑皇国海軍の坂本美緒。階級は少佐だ。」

「改めて、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケよ。よろしくね。」

そうして次々と紹介していく501のウィッチ達。名だたるエースばかりで、私が  
ひどく小さく見える。

……ダメダメ！ここで弱気になっちゃ、ウィッチになつた意味がない。落ち着け、落  
ち着け……。

「本当はあと一人いるんだけど……。『ガチャッ』……。あら、来たみたいね。」

「……。新入り？」

……。!?その声を聞いた瞬間、自分でも血の気が引いていくのがわかった。

感情のあまり感じられない声。嫌でもあの時の記憶が蘇る。できれば聞きたくなかった声。

恐る恐る顔を向けた先には・・・

「オリシナさん、自己紹介を。」

「・・・オリシナ・サンカ。民間協力者をやってる。」

新人たちのトラウマ  
未来のウィッチがいた。



side オリシナ

役人との会談（ブリタニア軍の勧誘だった）を終えて基地へ戻ってくると、ヴィルケ中佐が呼んでいたと伝えられた。そういえば今日は何かあったような。

結局部屋につくまでに思い出せず、入ってようやく思い出した。

ブリタニアのウィッチ、リネット・ビショップ軍曹。ひどく顔色が悪いが、大丈夫だろうか。

「・・・気分が悪いなら、医務室で休んだら？」

「ひっ！・・・は、はい！大丈夫です！」

あ、今ので思い出した。この前の教導にいた一人か。

あの時は模擬戦用の機関銃だったが、たしかライフルでの狙撃が得意だったか。

大型ネウロイ相手に決定打が与えられなかったけど、ライフルなら使えるかな？ 今度聞いてみよう。



side リネット

配属されて数日たったある日、その日は501にきて初めてスクランブルになった。

私とバルクホルン大尉、坂本少佐とオリシナさんが今回のメンバー。

数分後、ネウロイと交戦。大型が一体だけだった。私の動きを見るのが目的の一つらしく、坂本少佐もバルクホルン大尉も積極的には墮としに行っていない。オリシナさんは一撃離脱が基本のようで、あまり有効打が打てていない。

大丈夫・・・怖くない・・・。そう言い聞かせて、狙いをつける。ほんの一瞬見えたコアは、再生した装甲に隠れてしまっているけど、こボーイれスなら貫ける。Mk1

息が上がる。手先が震える。汗がにじむ。落ち着かなきやいけないのに・・・、当てなきやいけないのに・・・！

祈るようにして、私は引き金を引いた。

「そう気にするな。誰にだって失敗はある。」

「……はい。」

結局、私の撃った弾は僅かにそれ、装甲をえぐるまでにとどまった。

ネウロイの赤い模様が光りだして、死を覚悟するにまで至ったけど、オリシナさんが銃を乱射しながらすれ違って、一瞬だけネウロイの攻撃が遅れた。その隙に少佐と大尉がコアを破壊して全員帰投、今に至る。

「……また何もできなかった。やっぱり、私は……」

「……はあ。ま、今日はもう休め。堪えた時は休息をとるに限る。」

「……了解しました。失礼します。」

そう言つて、逃げるように部屋に戻った。

ベッドに倒れこんで、思い切りため息をつく。思えば、実戦に出た後は必ずこうしている気がする。

「……そんな自分が、どうしようもなく嫌になる。」

コンコンコン

「?・・・はい。」

・・・誰だろう。バルクホルン大尉かな?

ぼんやりとそう考えながら、私は返事を返した。

「開けてくれる?」

・・・え?

今の声は、いや、でもなんであの人が?

さっきの戦闘のこと?それともこの前のこと?

あの教導の後に訓練校でささやかれた噂。あの人は人を殺したことがあるとか、部屋に一人でいるときに尋ねてくると殺されるとか。

「・・・?入るよ。」

あ・・・ああ・・・

ドアノブが回ったところで、私の意識は途切れた。



「・・・う・・・うん・・・」

目を開けると、最近ようやく見慣れてきた天井が映った。いつの間にか寝ていたみたい。

なんだかひどい夢を見た気がする。考え事をしていたらオリシナさんが部屋に入ってきて……。

「……夢？」

「悪い夢でも見た？」

っ!?

ベッドの脇を見ると、オリシナさんが椅子に座っていた。……夢じゃなかったんだ。

オリシナさんはまっすぐこっちを見てくる。何を考えてるかも、何を思っているかもわからない顔で。

やっぱり……怖い。

「……ねえ。」

「!?は、はい!」

「今度、君の銃を借りていい？」

……え?

「あれなら、大型も倒せるかも。だから貸してほしい。あと教えて。」



てつきりさっきの戦闘のことを言われるんだと思つていたら、思つてもみないことを聞かれた。心なしかオリシナさんの目がキラキラしてる気がする。

・・・なんていうか、余計にこの人のことがわからなくなってきた。いつもはほとんど表情を変えなくて、一度空を飛ばば本当に殺されそうな迫力で、でも今は年相応に、まるで新しいおもちゃをもらつた子供みたいに。

・・・どれが本当のオリシナさんなんだろう。思えば私は避けてばかりで、ちゃんと話したこともなかった。

「・・・わかりました。明日のお昼でもいいですか？」

「わかった。それじゃあ「それと！」・・・？」

「・・・少し、お話しませんか？」

私も一歩ずつ踏み出していかないと。



side ミーナ

「オリシナさんも一緒に？」

「ああ。扶桑に有望なウィッチがいるらしいというのは聞いているだろ？スカウトする

ついでに、あいつオリシナの教導も済ませてしまおうかと考えてな。」

「確かに、それなら先方の要望にも応えられるし護衛としても頼りになるわね。・・・わかったわ。二人がいない間は任せておいて。」

「ああ、頼むぞ。・・・しかし、こういうのを運命のいたずらというんだらうな。」

「・・・そうかもね。まさか、あの宮藤博士の娘さんなんて。」